

エッセイと
小さな物語たち



野村由紀

目次

巻き線香	1
風を送るもの	2
さくら降る日	4
狼に最も近い犬 柴犬	6
猫の集会	8
女が四人で家を買う	10
ボロアパート 愛ある15の人生	14
たんぽぽ	18
奥付	21

巻き線香

巻き線香 (エッセイ)

火を絶やさないようにと巻き線香の残量を気にしながら、通夜の席で従姉の茂子はポツリとつぶやいた。

「なあんも、これと言って得意なもんあったわけやないけど、おかあちゃん偉い人やったなあ」茂子の弟も妹もこっくりと頷いた。

「私はなあ、生んでくれたおかあちゃんが死んで、新しく来てくれたんがこのおかあちゃん、どんなに良かったか分らへん」

茂子は昔話を始めた。

新しい母は茂子が5歳の時、後添えとして嫁いできた。気は悪くないのだが、口調のきつい夫である父は「ぐずじゃ、のろまじゃ」と仕事の疲れを母に当たっていた。だが母は黙って家業の瓦作りも家事もぼつぼつとこなしていた。

茂子が小学3年生のある日のことであった。その日は学校から帰ってくると、母も弟も妹も家にいなかった。昨夜おおきなこえで父が怒鳴っていたのを思い出した。きっと母は実家に帰ったに違いないと茂子は思った。これで三度目なのだ。

「又おかあちゃん、いんでもおた。なんで私一人置いておくん？ 私だけが本当の子とちがうから？」実の母だとももっていたのに悲しくてせつなくて、お腹の中にもやもやしたものが膨らんできた。でも幼い茂子にはどうにもならないことであった。

翌日母は帰ってきた。そして、何事もないように日は過ぎていった。

それから一月くらいたったときであろうか、母がとなりのおばさんと立ち話をしていた。

「学校休まんようにしてるだけやのに、茂子は勉強が良おできる。たのしみやわ」

目を細めて嬉しそうに話を交わしていた。

茂子のたまっていたもやもやは、霧がはれるように消えた。

「もう、四十年も前のことやわ。ふふ」

茂子は小さく笑った。そして小さく泣いた。

線香の香りが皆の鼻腔を、又もやくすぐった。

風を送るもの

風を送るもの (エッセイ)

幼き頃 (昭和三十年)

暑い夏。蚊帳の中。

二つの布団に、七歳の兄、四歳の私、二歳の弟の三人が眠っている。母が横すわりで、団扇を動かしている。そよそよと、優しい風が、頬や手を伝わってくる。一定の間をおいて、風が来る。又風が来る。

しばらくして、風がやんだ。熱気が体におちて、薄目を開けた。母が肩を回していた。長い間、手を動かしていたので、疲れたのだろう。

「おかあちゃん、もういいよ」兄が口を開いた。「大丈夫、寝なさい」母は、ちいさな声で言った。風がくる。又風が来る。三人は寝入ってしまった。いつ風がやんだか、分からない。

昭和三十六年七月 (小学三年生)

四時間目の授業が始まった。三時間目が体育だった。暑いあつい。七月の外気に、元気な小学生五十人の熱気がプラスされて、教室はまるで蒸し風呂だ。

誰かが、下敷きをだして、バタバタ仰ぎだした。それにつられて、残りの全員が我もと、パタパタやった。ペコペコ、バタバタ、にぎやかな授業の始まりだ。担任は、自分も扇子でパタパタ。

しばらくして、「もう、仰ぐのんは、お仕舞や。国語八六ページ」と声をかけた。

昭和三十七年八月

「お前、モノかんがえとるんか！」兄は父に叱られていた。回っている扇風機の網目のあいだから、鉛筆を差し込んだのだ。羽は、ガキッと高い音をだして、欠けた。

夏休みに入ったばかり、まだまだ扇風機は活躍しなくてはならない。「ごめん」と謝る兄に、父の二言目はなかった。外勤で疲れた父であったのに。

昭和五十一年九月

私は長男を出産し、実家へ帰った。弟の部屋を開け放してもらった。新生児のために、クーラーの風を、扇風機でかき混ぜ適温にした。団扇で育ててくれた母に見習いたいが、疲れる。ありがたく扇風機をつかわせてもらった。

弟は、居間の片隅で、「これもいいよ」といいながら、団扇をうごかしていた。

今、モノを考えない兄は数学者となり、機械不要の弟はコンピューター技師となった。

さくら降る日

さくら降る日 (エッセイ)

4月も半ばが過ぎた日、桜が終わり、冷え込んだある日のことです。熱いお茶を義母と二人で飲んでいるときでした。

義母は、ぼつぼつ語りはじめました。

「ウチが高等小学校一年の時の事や。おなごの親が病気で死んでしもうたんや。悲しかったわなあ。そんときの話、聞いてくれるか？」

実家はな、瀬戸内のあったかあい淡路島や。家族は、両親と鼻の低いぶちやいくな女六人と息子一人の七人兄弟で、うちは下から二番目や。そんな中で、大事な後取息子が腸チフスになってしもおてのお、おかちゃんは、もう付きっきりで看病したんや。兄やんは治ったけど、おかちゃん自身が移ってしもた。病状は思わしくなかったみたいや。けどそんなこと、小学生のウチと妹にはよお分からんかった。

そんなころ、家の庭には大人一抱えくらいのおっきな桜の木があったんや。満開のころには通る人が皆『きれいぞなあ、目がよるこんどるわ』言うてくれたほどの桜や。

そんな桜がばあっと満開の日やった。

ウチは妹と学校から帰ってきたら、家の中がバタバタしとる。父親が『庭であそんどれ』言うもんやから、妹と桜の枝に飛びついて、ワッサワッサしとった。はなびらが、はらはらおちてきてのお、きれいな色とええ匂いも、落ちてくるんや。自分とこの木や、思たらちょっと誇らしいてな、ええ気持ちやった。けど、そんな気持ちはすぐ飛んでしもた。姉やんが、おかちゃんが死んだと伝えにきたんや。妹と二人で木から降りて、ワーワー泣いた。泣いて泣いて、桜の色も匂いもなくなってしもうたわ。

そんなら、一月くらいしてからのお、桜の木は切り倒されてしもおた。根付く寝つく云うてな、あかんのや。あれから七十年もたったんやなあ。けんど、いまでも桜の香りにつつまれたら、おかちゃんのことや、悲しかったことや、誇らしかったことや、みんな思い出すんや」

あの語りを聞いた翌年、義母は心臓であっけ亡くなりました。私は桜のころになると、あの切ない話を思い出すのです。

狼に最も近い犬 柴犬

狼に最も近い犬 柴犬 (エッセイ)

ウーウーと消防車のサイレンが鳴る。私は、この寒空に気の毒だなあと音のする方へ顔を向けた。すると我が家の犬が、口を天に向け、おおかみのように、ウオーウオーと物悲しい声を上げた。サイレンの音が聞こえなくなるまで、遠吠えを続けていた。

その昔、猟犬であった柴犬はときどき野生の血を入れたという。雌犬を山につないで狼の血を入れたのだ。狼のDNAに最も近い犬が柴犬だという。

多くの柴犬は、他人には懐かず、飼い主にだけ忠誠を誓う。我が家のゆうすけもそうだ。生後3カ月でやってきた彼は、猟犬というにふさわしく凶暴であった。小さくして親から離され、ペットショップの箱に入れられ、知らぬ人間の家に来たのだから、荒れ狂って当然と言えるだろう。かわいそうではあるが、人間である私たち家族は、お気楽にもかわいがってやる小動物を求め、彼をかわいがった。

ゆうすけは黒柴である。柴の八割が赤（茶色の毛色）一割が黒、あと一割が白だという。黒い彼は目の上に白い斑点がある。四つ目とよばれ、お年寄りのおおくは不吉な犬と嫌う。「マロ眉」の彼はおっとり表情で、迷信である「死からの使者」からはかけはなれている。

優秀な赤を作るための差し色でもある黒はアウトローであった。今黒は人気で、扱いは変わってきている。私は差し色の黒は、先祖返りしやすいのではないかと思うことがある。咬みついてばかりの幼いころ、私の腕は傷だらけであった。散歩では今でも他人に「触らないで」と頼む。家では言うことを聞いても、動物である彼はいつ豹変するかもしれない。それにくわえ、生意気にも、ときどき牙をちらつかせては意のままにしようとする。みせかけの唸り声も発する。

そんな彼は十歳になった。今では、お腹をだしては「撫でろ」という。外から帰ってきた私を全身で、目じりを下げてむかえてくれる。夜中、さみしくなると寝室のドアをたたく。なげてもらったおやつを空中キャッチしては、得意そうな顔をする。もう、猟犬の面影はほとんどない。だが、遠くを見つめる目、遠吠えをする声は野生のものだ。

なにもせず、食事にあいつているペットたちは、幸せなのだろうか？ 心の奥底で、本当の自由を奪って申し訳ないと思いながら、ゆうすけの頭を撫でた。

猫の集会

猫の集会 (ショートストーリー)

僕のお気に入りの場所、リビングの出窓で向かいの公園を見つめていたときだ。
「ねえ虎太郎、明日満月の夜、公園で集会があるよ。一度おいでよ」窓のしたから声がした。ノラネコ鈴子だ。

猫の集会、人間は知っているのだろうか？ 月の綺麗な夜、地域の猫がぞろぞろ集まる。何をしてもない、何を語るのでもない、ただ2.3時間、月を眺めて黄昏れるだけである。

僕は家猫なので外に出ることは難しい。でも僕の家から公園は近いので、窓から集会を5回も眺めた。僕は行きたい!! 逢いたい子がいるのだ。

僕は決心した。僕が家から出たら、ばーちゃんは悲しむだろう。でも、ほんのすこしのじかん、外出するだけさ。

翌日の昼過ぎ、隣の奥さんが回覧板を持ってきたとき、僕はすりと玄関をすり抜けた。ばーちゃんは叫んだ。ごめん、明日には戻るから。

昼過ぎから夕暮れになるまで、僕は裏山の竹林の中に隠れた。ここにもばーちゃんが「虎一、とら一」と探しに来たが、僕は上手く隠れた。

夜の8時過ぎに、僕は公園に着いた。20匹近い地域の猫たちがたむろしていた。みんな見覚えのある猫たちだ。鈴子も来て居る。

あの子は来ているだろうか？ 「あ、いる！」

その子は、僕と同じ毛色、僕と同じ目の色、妹に違いないと直感した。

その子と会えたのだ！

僕はずっと独りだった。生後二ヶ月くらいの幼い頃、ばーちゃん家のガレージで震えていたようだ。「こんなに大きくなって」と、その後何度もばーちゃんは、僕の頭を撫でながら言った。

僕の記憶は細かい点だ。その点が線になるかもしれない、ぽっかり空いた穴が埋まるかもしれない。あの子はすぐそばにいる。

「ねえ、君。僕が誰か分かる？」「お兄ちゃんでしょ」即答だった。

母も兄弟も生まれたところも分からなかった僕の心に、温かい何かがやって来た。温かい涙もあふれた。

あとがき

随分前テレビで、幼い頃に戦争孤児になられたかたが語ってられました。「戦後、僕の心の中には大きな空洞がある。自分のルーツが分からない。両親も兄弟も分からないから、自分はどこでどう生まれたか分からない。知りたい思いをずっとずっと何十年も抱えている」と。戦争は悲しすぎる。

女が四人で家を買う

女が四人で家を買う (ショートストーリー)

「ちょっと、これ見てえ。」芳子が立花不動産のまえで友人三人を呼び止めた。

「ほら、大きな家やわ」芳子はその売り物件の貼り紙を読み始めた。

《神戸市西区北山台 徒歩20分 1050万円 5DK 建物144㎡ 土地280㎡ 1975年4月(築34年)》

後の三人がかけよってきた。

「見ないと分からないけど、安すぎるわ。なんかあるよ、きっと」
は小さな声でつぶやいた。 勢津子

「しょうもないこと言っていないで、帰るよ」
長者の久子がさえぎった。 一番年

四人は近隣の公民館主催の川柳教室にかよう友人達である。一番遅く入会した有希子でも通い始めて二十年になる。四人は年齢も六十三歳から七十歳と近いこともあって、つかずはなれずで仲良くやっている。

有希子は不動産物件を見たその夜、張り紙が頭から離れないでいた。 <思いつきだけじゃないわ。別荘購入、出来ないことはない。三年前に社宅から今の家にかわったので住宅購入の事は分かっている。難しくはない。一人では買える金額じゃないけど、四人では充分。たのしそうお> 行動の早い有希子はまず立花不動産に行って、物件を見せてもらうことにした。腰の軽い芳子も誘った。

三年前に世話になった立花さんは愛想が良かった。「遊び半分で見てください。ご案内します。持ち主は御高齢になって、便利な駅近くのマンションに移られました。確りと建った良い家ですよ」

そう言って有希子達が住んでいる町から二駅さきの物件まで車で案内してくれた。

車というものは、坂道がどのくらいだか、歩いたらどのくらいだかわからないものだが、ともかく三十分足らずで到着した。そこで見た家の大きさに有希子は驚いた。

小さなマンション暮らしの有希子の目には豪邸に映った。掘り込みガレージは二台分の大きさだ。石段を上がると玄関まで草が茂っていたが、おおきな庭であった。玄関ドアは重たい木のドアで、痛みもなくどっしりしている。

鍵を開けると、少しかび臭さく、無垢の下駄箱が三畳ほどの玄関にどっかと居座っていた。階下は二階に続く廊下とリビングとキッチン・六畳和室が二つであった。それに勝手口に小さな手洗いがついていた。犬の足洗いであろうか？ 邸宅に犬、似合いすぎである。

二階は八畳間が三つ、洋室二つと和室が一つである。それぞれに窓がふたつあり、明るさも風通しもよさそうである。最後に階下から裏に出ると、大きな庭が目に入った。小さな畑が出来る！ 夢はさらに膨らんだ。

提案はつぶれる筈であった。家は大根じゃない、平凡な主婦が共同購入するものではない。しかし、しかしである、提案はあっさり受け入れられたのだ。

最初に、鼻も引っかけないはずの久子が承諾した。「気を使いすぎる嫁がうっとうしいので、時々逃げだすことにする。面倒なので登記などの権利はいらぬ」腰が痛いので一階の和室を希望した。

出資金二百万円は、借家やガレージを所持している資産家の久子には軽いだらう。

次に提案者有希子は二階の洋室を希望。とりあえずは反対する亭主には言わない。秘密

なので、権利はあきらめた。出資金二百万円はパートで貯めたなけなしの資金だ。念願の野菜づくりが出来そうだ。

その次、勢津子は唯一の独身者である。美人で利発で、今は長年勤めあげたあと年金生活をしている。遺す者がいないと権利は放棄した。一人暮らしは小さな住いで充分と2LDKにすんでいるが、土のあるところで花でも作りたいと、参加することにした。希望は二階和室だ。出資金二百万円で新しいワクワク空間を買うのだそうだ。

最後、芳子は、高齢の実母と夫と住んでいる。舅・姑を看取り次が母だ。気が良くて優しいので、だれかれが寄ってくるという感じである。「損だ損だ」と言ってる。ご苦労様なことだ。

芳子は唯一夫と相談した。「好きにせー」と言われ、好きにした。家族に内緒にしていなかったので、権利を一人で貰うことになった。わるいので出資金は四百万円支払うという。本人は二階の洋室であこがれのベッド生活してみたいそうだ。

立花不動産は手際よく売買を終わらせた。費用の内容は物件値引きが百万で買値は九百五十万、不動産手数料が三十六万円、固定資産税は約八万円。ほぼぴったりだ。維持費も水道と電気だけである、分ければ軽費ですむ筈だ。

その後ひと月は楽しかった。駅からかなりの坂道・山の上であったが、ついてみれば落ち着く。四人は、畳とふすまを新調して、ワックスとペンキを買った。ゆっくり眺めると、家の中はかなり痛んでいた。それでも皆で掃除をしていくと、みちがえるように家は生きてきた。

自分の持分の部屋を、それぞれが自宅の不用品で飾りつけた。四人は部屋を訪問しあい、小学生のように笑いあった。

あれから三ヶ月、家を訪れる者はすくなくなった。我が家で雑用がある主婦達は、中々足をはこばないのだ。ぽつぽつと、維持費がもったいないね、とつぶやく者がふえていった。どうなることやら……。

しかし四ヶ月目風向きが変わってきた。有希子が植えたトマトキュウリの苗がおおきくなり、実を結んだ。勢津子の花も美しく咲きそろった。二人は頻繁に足をはこぶようになった。優先順位の曜日を決めてあるだけでいつ来てもよい別宅なので、ひとりふたりとおとずれると、自然に他のものも来るようになった。

有希子は風の入る二階部屋でねころび、久子は台所でみんなのうどんを作ってくれた。母の介護が始まった芳子は時間が取りにくかったが、月二度ほどはしゃべりにやってきた。

その後四ヶ月目の十二月にはもっと風向きがかわった。十月に有希子の伴侶が突然に亡くなったのだ。有希子は四十九日を終えると炬燵を抱えて別荘に居座ってしまった。「ここは広々としていてきもちがいいし、家にいると考えこむので」というのだ。そしてその暮れ芳子が夫と大喧嘩をして別荘に泊まりに来た。ま、二日で帰ったものの、出入りは密になってきた。

まもなく有希子は「こちらにいる期間が長いので光熱費は自分が出す」と言い出した。気が済むならと、約束事はぼちぼち変えられて行った。年が明けると芳子が「投資の半分二百万円が還元できる」とうれしそうに言った。

息子の結婚が決まったのだが、式は二人でさっさと海外で挙げたという。挙式費用はすくなくてすんだが、親戚が「おひろめないのか？」とやってきたので、仕方なくここで会食をしたいというのだ。たしかに一階ふすまをあければ三十人くらいは入れる。賢明な使用法だ。残りの三人は「仲居さんをしてあげる、だからおべんとうよろしく」と心配りした。

女の六十歳代の環境は変化していく。連れ合いが亡くなったり、病気になったり、子供が結婚したり、親の介護がはじまったりおわったり、だ。逃げこむ空間があるのは、しあわせか、不幸か、その鍵はやはり本人だけが持っているのだろう。

ボロアパート 愛ある15の人生

ボロアパート 愛ある15の人生 (ショートストーリー)

101号室、駿29才。

僕はこの部屋が好きだ。オンボロで隙間風が入るアパート。安い家賃なので安月給の僕でもやっつけていける。それに105号室の女の子が可愛いんだ。毎朝すれ違う時に会釈してくれる。僕の5秒間の幸せさ！

102号室、啓太22才。

僕は来週このアパートから出ていく。貧乏学生だった4年間、この部屋の生活はたのしかったなー。お金はなかったけど、アルバイトにあけくれてたけど、母さんに迷惑かけなかったことが、僕の誇りだ。

103号室、洋子70歳。

ここに来て3年たった。自由が嬉しい。こんなにうれしいものかと思うほど毎日が楽しい。息子夫婦と一緒に生活してた時が不幸せだったんじゃない。ただ一人になりたかっただけ。食べたいものを食べる。起きたい時に起きる。そんな生活が今、とっても面白い。隣の啓太も美穂も可愛いしね。

104号室、美穂11歳。

かあさん、この部屋に住まわせてくれてありがとう。そしていじめられていた私を全身でかばってくれて、転校までさせてくれてありがとう。中学になったら新しい学校になるので、私、強くなるね。かあさん、私絶対につよくなるよ！

105号室、奈央25歳。

私、DIY女子なの。大家さんが、この部屋好きにしていよというので、壁紙変えて、防音にして床暖にして、キッチン変えちゃったわ。外のぼろさど中は大きい！好きなことできるって、しあわせー！！！！

201号室、みさき27歳。

あー疲れた。インストラクターと英会話とお弁当屋の仕事、かけもちは疲れるわ。残り物のお弁当5つもらってきた。美穂ちゃんと食べよう。お母さん遅くなるってたんね。残りの三つは啓太にあげる。彼、よく食べるからねー

202号室、保45歳。

人は住まいや着るもので判断するよな。僕、しがない中年みたいだけどネットではチョットした小説家だ。結構な通帳残高、何に使うかな。へへへ

203号室、友香26歳。

2年前に205号室の雪子と一緒にこのアパートの入ったんだけど、私はすこしここに飽きてきたかなあ〜。でも友達の雪子は気に入ってるし、まあいいか。雪子は器用で私にも洋服縫ってくれたり裾直ししてくれたり、ほんとミシンが好きだね。それとこのアパート、女性がおおいので安心なんだけど、隣の202号室のおっさん、人のよさそうな顔してるけどちょっと気味がわるいのよ。

204号室、幸42歳。

夜の仕事に入って5年。いつまでたっても水にあわないわ。でも目標額に達成するまでは頑張らなくては……。昨日いただいた高級そうなチョコレート、美穂ちゃんにあげよう。お手紙かいてポストに入れておこう。あんないい子がどうしていじめられなきゃいけないのか、泣きたくなるわ。

205号室、雪子26歳。

事務職の後のミシン、少ししんどいな。でも好きなミシンなので頑張るか！口伝えて裾

直しを頼まれている間に、私が着ている服と同じのが欲しいとか、たのまれて、結構仕事が増えてきた。ミシンは7時から12時の間なんだけど、音だすのは気が引けるのよね。105はいつもガンガンしてるし、204は夜いないんだけど、上のおじいちゃんには気を使う。明日は手製のマフラーでももっていくか。

301号室、家主・和夫71歳。

父から譲り受けたおんぼろアパートを建て替えるお金もなくて続けている。もう20年たつが家賃が安いおかげか、文句も聞かず今に至っている。家賃不払いはあるけど、まあいいさ。私も年だ。喰っていけばいいさ。あ、105号室の奈央ちゃん、実家に帰ると言ってたな。「ねえ家主さん、私の部屋ね、静かで温かくてバリアフリーできれいじゃん。私の後ね、3階のおじいちゃんに入ってもらえないかなあ？このあいだ、腰を痛そうに階段を登ってたのよ。ここ1階だし、きっといいよ。前の住人が入ってほしいと言ったら移ってくれるんじゃない？DIY女子としたら、最適な人に入ってほしいわけなのよ」奈央ちゃん、今どきの子だと思ってたけど、細やかな優しい子だったんだ。餞別を頑張らあげよう。

302号室、貴子70才。

和夫、いいかげん私を見なさいよ。幼稚園から一緒に、親友の美智子を妻に世話したのも私。美智子が亡くなったとき和夫と子どもたちと一緒に泣いたのも私。20年前、アトリエとして302号室を貸して貰った。それからもずっと一緒。これって、純愛というのか、腐れ縁というのか、どっちなのかしら？

303号室、涼介51才。

駅前で10坪足らずの喫茶店を始めた。ここには寝るために帰るだけだ。妻が家を出て行って、今やっと次のステップにたったところだ。家出の原因は全て私が悪い。飲む打つ、最低の男だ。こんな私の店でも、ぼつぼつと常連さんがつき始めてきた。家主さんとお隣さんもそうだ。あの二人は姉弟なんだろうか？「和夫、新聞とって」「うん」その会話だけなんだけど、ふたりはオレンジ色の空気をまとっているみたいだ。

304号室、輝20才。

私は貴子先生にあこがれて、このアパートに住んでいる美大生。日本画の大家なのに、気さくな方で、今では週2回お部屋にお邪魔している。絵筆の手ほどきはまだなんだけど、昨日、あんた本気あるの？、なんて聞かれて、天にも昇る気持ちなの。バラ色で、きつとこんな日のことを言うんだわ。

305号室、庄司80歳。

あいつはダメだ。娘の婿は働かない。働かない奴と暴力をふるう奴は治らない。早く別れるように言ったがなかなか離婚しない。たぶん自分が同居しているせいだろうと、私は独り引っ越した。一人生活はやっていける。ただはやくあの男から離れてほしい。だが先日娘からメールがあった。「おとうさん、やっとふんぎりがついたわ。ながいことごめんね」娘は大丈夫だ。働く力があるのだから。

たんぽぽ

たんぽぽ (エッセイ)

私は朝から体がだるく熱っぽかった。早いうちにと、会社を休み近所の医院に行った。その日は患者が多く、待ち時間が長くなりそうであった。私は微熱のためか、雑誌を読む気にもならず、ぼんやり中庭の方に目をやった。そこには愛らしい黄色のタンポポがあちこちに花咲かせていた。ああ春なんだ、とぼんやりみていると、隣に座っていた年配の婦人が話しかけてきた。

「時間、長くかかりそうですね」天気の話や体調のことなどの話を交わした後、ふと見上げた二人の視界に、タンポポの花が人って来た。波長が合ったのか、待ち時間と言う空間のせいかな、その婦人は「少し、昔話、いいですか？」前置きされてから、ぼつぼつ話をはじめた。

私が高等小学校一年の頃の母の思い出話です。今で言うと十二歳位の頃でしょうか。私の母は義理の母でしたが、とても優しい人でした。母がやってきたのは、私が五歳、弟が二歳のときです。実母がその一年前に病気で亡くなっていました。母はこの家の人となって数年経っていましたが、自分を出す事の無いおとなしい人でした。

母は、たくさんの家事と畑の仕事をし、父にも祖母にも気を使い、疲れていたのだと思います。父も祖母も感謝しているのに口が下手だから、怒ったような言い方しか出来ませんし、母も同様に口が下手でした。体も心も疲れると、腹もたつでしょう。でも、やさしいから、腹をたてずに泣くのです。そうなんです。母は泣き虫でした。

私は母の泣き顔を何度もみたのです。当時、住んでいた母屋の一番はずれに、二畳程の小部屋がありました。誰の部屋でもない、何にも使われていない小部屋でした。私はその部屋に駆け込む泣き顔の母の姿を何度も見かけました。

そして、不思議なことに小部屋から出てきた母は、なにかふっ切れた様子でした。前掛けで涙をふきながら、弟の面倒をみている私に
「みっちゃん、ありがとう」
と言っては前掛けのポケットから小銭をだし、握らせてくれたものです。

記憶に残っているあの日は春浅い頃でした。いつもなら数十分で出てくるその部屋から、母はなかなか出て来ませんでした。部屋は薄暗い日の当たらない所なのに、窓下には日だまりができ、タンポポが気持ち良さそうに咲いていました。

二時間程して母は出て来ました。私と目があったのに、声も掛けず、うつむいたまま台所の方へ行ってしまいました。私は、なぜか急に悲しくなって、オイオイと声をあげて泣いていました。幼い弟の手が、私の肩にかかっているのに気づいたのは、しばらくしてからでした。それだけの記憶なのですが、妙に心に残っているのです。

もう昔の話で、他の細かい事は霧の中の海にいるように、ようにかすんでしまっています。でも、私は子供でしたが女の悲しみに同調したのかもしれない。そこだけがくっきりと、妙に記憶に残っているのです。

タンポポは私にとって母の悲しさを思い出させる花なのです。

以上の話の後で婦人は
「あとで聞いた事ですが、その小部屋は泣き部屋呼ばれていたそうです。我慢ばかりの昔の嫁の為の逃げ込み場所だったそうです」
と付け加えた。

上質の短編小説のような話を、タンポポと婦人からもらった。
深く心に残る話であった。

奥付



奥付えっせい.png

エッセイと小さな物語たち

著 野村由紀

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
